別添４　　厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

フォーカスグループインタビューを通じた計画相談支援の思考過程の可視化と考慮すべき要素の研究

研究代表者　石山 麗子　　国際医療福祉大学大学院・教授
研究分担者　小澤 温　　筑波大学・教授
研究分担者　鈴木 善雄　　国際医療福祉大学大学院・助教

研究要旨

計画相談支援の思考過程の可視化と考慮すべき要素を明らかにするために相談支援専門員の熟達者グループと初任者グループに対し、インテークからモニタリング迄の思考過程と行動、考慮を振返るフォーカスグループインタビューを 3 年間行い、カテゴリーを生成し比較した。

初回面談で最初に確認することで生成されたカテゴリー【利用者との関係性の構築】、【利用者に関する情報収集】は両グループに共通し、熟達者グループでは3年間一貫した。この結果から、相談支援専門員が計画相談支援の初回面談で最初に行うことといえる。初任者は経験を積むことで熟達者の視点に近似していったが、熟達者の1年目段階はより広く複眼的な点を備えていた。今後は初任者の思考プロセスや行動の特徴を踏まえたアセスメント様式の作成や教育の充実が図られることで、相談支援専門員が行う計画相談支援の更なる質の向上に資する可能性がある。

A. 研究目的

相談支援専門員が担うサービス等利用計画は、利用者の自立支援とQOL向上に資すると同時に障害福祉サービスの支給の根拠となる重要な位置づけにある。サービス等利用計画の作成に関する手引きやサポートブック等は過去にも作成されてきたが、一連の様式は統一されておらず相談支援専門員がサービス等利用計画を作成するうえで標準的に行う思考の枠組みを整理した文献も見当たらない。本研究では3年間でサービス等利用計画策定における相談支援専門員の思考と判断の枠組み、手順の明確化、相談支援を行う際に考慮すべき要素を明らかにし、サービス等利用計画における熟達化の段階（経験年数等の相違）による思考や行動の変容も明らにする。本研究は、3年目（最終年度）に該当する。

B. 研究方法

フォーカスグループインタビュー（以下、FGI）を用いた質的研究法である。相談支援専門員が行う計画相談支援の思考過程の可視化と考慮すべき要素の研究を行った。

具体的には熟達者（主任相談支援専門員）グループ10人、初任者（研究開始初年度時点において経験3年未満の相談支援専門員）グループ11人に対し、インテークからモニタリング迄の思考過程と行動、考慮を振返るFGIを同一メンバーで年2回それぞれのグループに実施、逐語録から要素をカテゴリーとして抽出した。初任者グループと熟達者グループの比較、併せて、令和4年度、及び令和5年度の結果と3年間で比較し、思考過程の特徴や変化を見出すこととした。

なお、研究協力者のメンバーは熟達者、

初任者ともに3年間固定した。しかし、3年目は異動等により各グループ1名離脱した。

インタビューガイドは、第1回はサービス等利用計画作成のための初回面談実施時の確認内容、判断の根拠、初回面談の目標設定、以降の展開、留意点とした。なお、FGIは各グループ別に実施しており、異なるグループのディスカッションを聞くことや、議事録を確認することはなかった。これは異なるグループのディスカッションからの影響、とりわけ初任者グループが熟達者グループのディスカッション内容をお手本として発言することのないようにするためである。

（倫理面への配慮）

国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号22-Ig-126-2）。FGIの実施前に協力者への説明書を送付し、事前に同意を得てから実施した。倫理的配慮の主な内容は、協力者が特定される情報は記号化すること、研究協力への同意の撤回が可能であること、研究結果は報告書や論文等で公表すること等であった。

C.結果　及び　D.考察

１．調査実施日と協力者

FGI実施は、熟達者、初任者の各グループに1年に2回実施し、3年間同じメンバーの協力を得て継続した（表1-1）。

表1-1.FGI実施日

熟達者	1回目	2回目
1年目	2022/10/14	2022/11/8
2年目	2022/10/4	2023/11/27
3年目	2024/10/25	2024/11/5

初任者	1回目	2回目
1年目	2022/10/4	2022/11/25
2年目	2023/10/6	2023/11/2
3年目	2024/10/18	2024/11/29

協力者の経験年数は、研究1年目を基準に最も短かったのは初任者で1年6か月、最も長かったのは熟達者の19年であった。初任者は20～50歳代、熟達者は40～50歳代であった。主な計画作成の領域では、両グループで最も多かったのは精神、次いで知的障害、発達障害だった。熟達者には領域を限定せず計画相談支援を行っている者が存在した（表1-2）

2．研究1～3年目における熟達者と初任者のカテゴリー

令和4年度（以下、1年目）から令和6年度（以下、3年目）に実施した、3年間の熟達者及び初任者のグループ別、回数別（1回目、2回目）別の各カテゴリーは巻末資料表1－3～表1－6に示した。

以下、思考プロセスを確認するためにインタビューガイドごとに結果と考察を記載した。

3．熟達者グループ、初任者グループにおける3年間の結果及び両グループの比較と考察

(1)　新規の利用者との初回面談の場で最初に何を確認していますか。

①　熟達者グループ

熟達者グループでは3年間にわたり一貫して【利用者との関係性の構築】、【利用者に関する情報収集】が生成された。計画相談支援の初回面談における相談支援専門員の基本的視点や行動であるといえる。

初回面談では【複数人での訪問】（1年目）と【相談支援専門員による違い】（3年目）生成された。熟達者は初回面接の段階から複眼的視点を取り入れて同一職種間における視点や支援のバラ

つきを防止し、平準化を意識していると考えられる。

② 初任者グループ

初任者グループで「初回面談でまず行うこと」で生成されたカテゴリー数は1年目（6つ）、3年目（3つ）へと半減した。3年間共通したカテゴリーは１つで【利用者に関する情報収集】だった。2年目には初回面談でまず【利用者への情報提供】を行っていたが、これは3年目には生成されなかった。

③ 両グループの比較

3年間一貫して出現したカテゴリーは初任者は１つ【利用者に関する情報収集】、熟達者は2つ【利用者に関する情報収集】と【利用者との関係性の構築】だった。

初任者グループのカテゴリー数は1年目（6）、2年目（3）、3年目（3）へと変化（減少）したのに対して、熟達者は1年目（4）、2年目（3）、3年目（4）とほぼ一定だった。

初任者は3年目には【多職種との初回同行訪問】という多職種協働による初回面談を行う思考と行動の変化が生じていた。熟達者では【複数人での訪問】（1年目）と【相談支援専門員による違い】（3年目）生成されたことから、多職種の複眼的視点と、同一職種間における視点や支援のバラつき防止、平準化の意識があり、専門職としての“他者”の存在があった。

両グループの相違をまとめると、熟達者には初回面談の時点から他者との協働が定着していること、多職種の視点（広がり）と、同一職種同士の視点の平準化（集約）があった。一方で、初任者は多職種の視点は入ってきたものの、同一職種の平準化の視点はまだ生じていなかったことである。

一方で熟達者にはなくて、初任者経験2年目にだけあったのは初回面談でまず行うことに【利用者に対する情報提供】が生成されたことである。この段階では利用者はまだ十分に語っているとは限らない。拙速な情報提供は、利用者の役に立ちたい、計画に結び付けなければならないという焦りが背景背景にあると考えられる。奥川は、クライエントに対する助言は面接の早い段階では行わないものであると述べている[1)]。なお、このカテゴリーは初任者3年目には出現しなかった。

(2) 初回面談では次に何を確認していますか

① 熟達者グループ

次に行うこととして熟達者において3年間共通したのは【利用者との関係性の構築】、【利用者のニーズ把握】だった。面談では【本題への切り替え】（2年目）や【面談の進め方】（3年目）を考慮し、面談をコントロールしていることが伺てた。

同時に【スピード感の確認】（1年目）や【相談経路の確認】（2年目）、【本当は誰の意見なのかの見定め】（3年目）等、誰の意見になのか、どの程度のスピードで対応すべきなのかを初回面談を行いながら判断していた。このような整理をしながら面談の後期では【事業所候補の判断】に軸足を移していた。

② 初任者グループ

1年目、2年目には情報収集の具体的な項目名として「経済状況」や計画書の基点となる「ニーズ把握」を意識していた。これらは聞き取りや分析の難易度の高

さを感じており、語りに現れたと考えられる。3年目には【利用者に関する深堀した情報収集】の一つだけが生成された。

③　両グループの比較

カテゴリー数を両グループで比較すると面接の展開は、熟達者に比べて初任者は限定的だった。この結果から、初回の面談初期から次のステップへ移行していく面談の展開は、初任者が実践をふかめられていないか、実践はできているがFGIにおいて言語化するに至っていないかのいずれかの理由が想定される。いずれにせよ、面談を構造化して捉え、意図的な展開を行うに至らないことが明らかになった。初任者、面談の構造化や展開の技術について熟達者から学んだり、同席による面談の指導を受ける必要がある。他方、熟達者は日常的にOJTを通じて面談の構造や展開を説明することが求められる。

(3)　判断の基になるもの

①　熟達者グループ

カテゴリー数は毎年3～4生成されたが、年度を通じた一貫性や傾向の共通性は見いだされなかった。

②　初任者グループ

1～2年目のカテゴリ―数は1つで、判断の基となること自体が生成されにくかった。3年目間を通じた一貫性や共通性は見いだされなかった。

③　両グループの比較

両グループの比較に至らなかった。

(4)初回面談で設定しているゴール

①熟達者グループ

熟達者グループでは【見通しを立てる】、【具体的に動くための準備をする】、【本当のニーズを見つけだす】等、援助過程を見通したカテゴリーが生成された。

②初任者グループ

【接点確保】は1年目、3年目に共通して見られた。2年目では主訴が明確であるか、不明確であるかケースの場合分けをした対応に分かれていた。

③両グループの比較

【接点確保】は両グループに出現したカテゴリーだった。接点確保は、利用者との信頼関係の構築を図り、今後の援助関係に繋げることが初回面談の重要な目的の一つであることから、今後の【接点確保】が生成されたと考えられる。

(5) 留意・苦慮していること

初任者グループの3年間のグループ内での変化と、量グループの比較に関する結果と考察

① 熟達者グループ

熟達者グループでは3年間共通のカテゴリーはなかったが、【論点のズレ】や【本人と周囲の人の主訴が異なるときの対応】、【達成目標の認識のズレ】等、ズレや相違の調整の内容を表すカテゴリーが生成された。

計画の位置づけとして、利用者や家族に提示する観点のみならず、熟達者がスーパーバイザーや先輩として【見本とされる計画書】であることを意識していた。

② 初任者グループ

初任者グループには1年目には【利用者への配慮】、【利用者との駆け引き】、【時間配分】等、利用者と向き合う姿勢や、面談をコントロールしなければなら

ない意識が伺えた。2年目には【相談の推進体制】や【関係者間の調整】等、視点や思考は調整や連携に移行した。3年目には【本人と家族・支援者の意見の違い】に留意し、【関係者の強みをいかす調整】等、意思決定やエンパワメントの視点に基づく支援へと移行していた。

特に2年目には前出の「初回面談でまず行うこと」で生成されたカテゴリー【利用者への情報提供】は【計画作成】（2年目）と連動していたものと推定される。ところが3年目には【本人が関心のもてる計画作成】へ変化した。1年目に見られた【利用者との駆け引き】をする関係から、3年目には利用者を主語とした利用者本位、利用者を尊重するゆとりある関わりへと変化していた。

③ 両グループの比較

「留意・苦慮していること」は、熟達者グループ、初任者グループともに最も多くのカテゴリーが生成された。

初任者は3年を通じてケースや関係者に対する姿勢の変化がみられたのに対して、熟達者では利用者や関係者のみならず、スーパーバイザーとしての視点や【個別援助計画と連動しない状況】など仕組みに向けた視点へ広がることが両者の相違であった。

4. 結論

相談支援専門員が行う計画相談支援の思考過程の可視化と考慮すべき要素を明らかにするため、初任者グループと熟達者グループに対してFGIを3年間行い、比較した結論は次のとおりであった。

・初回面談で最初に確認することでは【利用者との関係性の構築】、【利用者に関する情報収集】は両グループに共通するとともに、熟達者グループでは3年間一貫していた。この二つのカテゴリーはことから、相談支援専門員の計画相談支援における初回面談
の視点と対応といえる。

・初任者は経験を積むことで視点や思考は毎年変化し、熟達者の視点に近似していった。一方で熟達者の利用者に対する視点や思考は変化が少なく安定していた。

・熟達者はFGI1年目段階で初任者3年目より広く複眼的な視点をもって思考、行動していた。

・初任者は面談のプロセスを構造化し説明することが十分にできなかった。

・今後は初任者の思考過程や行動の特性を踏まえたアセスメント様式や教育が行われることで、より質の高い相談支援に資する可能性がある。

Ｆ．研究発表

1. 論文発表　該当なし
2. 学会発表　該当なし

Ｇ．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得　該当なし
2. 実用新案登録　該当なし
3. その他　該当なし

参考文献

・特定非営利活動法人日本相談支援専門員協会. 平成23年度厚生労働省障害者者総合福祉推進事業, サービス利用計画の実態と今後のあり方に関する研究報告書. 2012
・奥川幸子. 身体知と言語. 東京:中央法規

表1-2 ．主な計画作成の領域

	精神	発達	知的	身体障害	重症心身	領域限定無
熟達者ｸﾞﾙｰﾌﾟ	4	1	5	0	0	1
初任者ｸﾞﾙｰﾌﾟ	6	2	2	1	1	0

表1-3. １回目3年間の比較［熟達者］

R4.10.14	R4.10.4	R6.10.25
R4年度 熟達者 1回目	**R5年度 熟達者 1回目**	**R6年度 熟達者 1回目**
1_初回面談で最初に確認すること		
1-1_利用者に関する情報収集	1-1_利用者に関する情報収集	1-1_利用者に関する情報収集
1-2_利用者との関係性の構築	1-2_利用者との関係性の構築	1-2_利用者との関係性の構築
1-3_利用者のニーズ把握	1-3_利用者のニーズ把握	1-3_面談の進め方
1-4_複数人での訪問		1ー4_相談支援専門員による違い
2_次に確認すること		
2-1_利用者に関する情報収集	2-1_利用者に関する情報収集	2-1_利用者との関係性の構築
2-2_利用者のニーズ把握	2-2_利用者との関係性の構築	2-2_利用者のニーズ把握
2-3_スピード感の確認	2-3_利用者のニーズ把握	2-3_面談の進め方
	2-4_相談経路の確認	2-4_本当は誰の意見なのかの見定め
	2-5_本題への切り替え	2-5_事業所候補の判断
3_判断の基になるもの		
3-1_他の組織からの意見	3-1_会話のパターンや判断軸を学んだ経緯	3-1_サービスの必要性認識とイメージ化の度合い
3-2_相談員のマッチング方法	3-2_会話の方向性を判断する要素	3-2_相談員からみたサービスの必要性の判断
3-3_事業所のマッチング方法		3-3_利用可能な地域資源
		3-4_利用し地域のチームを育てる視点
4_初回面談で設定しているゴール		
4-1_利用者の理解を深める	4-1_見通しを立てる	
4-2_利用者との接点確保	4-2_具体的に動くための準備をする	
4-3_時間厳守	4-3_本当のニーズを見つけ出す	
5_留意・苦慮していること		
5-1_利用者への配慮	5-1_本人と周囲の人の主訴が異なるときの対応	5-1_関係機関のマッチングと事前の調整
5-2_チームワークの活用	5-2_世帯支援	5-2_達成目標の認識のズレ
5-3_利用者の意向や状況を掴む上での工夫	5-3_計画の再作成	5-3_見本とされる計画書
5-4_利用者の成長・変化	5-4_サービス利用が終了したあとの対応	5-4_個別支援計画と連動しない状況
5-5_利用者と関係者との橋渡し	5-5_事業所が利用者を引き留める場合の対応	
5-6_論点のズレ		
5-7_接点頻度の検討		
6_その他		
6-1_AIに期待すること	6-1_初回面談場所	6-1_熟達者としての意識と変化
6-2_フェードアウト	6-2_新規と更新の違い	6-2_リスクマネジメントとチャレンジ
		6-3_地域資源の把握と共有化

表1-4.　１回目3年間の比較［初任者］

R4年度 初任者 1回目	R5年度 初任者 1回目	R6年度 初任者 1回目
1_初回面談で最初に確認すること		
1-1_利用者に関する情報収集	1-1_利用者に関する情報収集	1-1_利用者に関する情報収集
1-2_利用者との関係性の構築	1-2_利用者との関係性の構築	1-2_面談の進め方
1-3_利用者のニーズ把握	1-3_利用者に対する情報提供	1-3 _多職種との初回同行訪問
1-4_飛び込みでの相談対応		
1-5_本題に転じるタイミング・方法		
1-6_初回面談での出会い方・テクニック		
2_次に確認すること		
2-1_利用者に関する情報収集		2-1_利用者に関する深堀した情報収集
2-2_利用者のニーズ把握		
2-3_経済状況のヒアリング		
2-4_利用者との関係性の構築		
3_判断の基になるもの		
3-1_利用者に合わせた作戦を練る	3-1_相談経緯による判断	3 -1_他職種との初回同行訪問（利用者）
		3 -2_会話から資源として見極める（事業所）
		3 -3_相談支援専門員仲間からの情報（事業所）
4_初回面談で設定しているゴール		
4-1_サービス利用に向けた具体的な話	4-1_主訴が明確なケースの対応	4-1_支援過程のみたてと方向性決定
4-2_利用者との接点確保	4-2_主訴が不明確なケースの対応	4 -2_相談者の気持ちを受け止める
4-3_利用者との認識の共有		4 -3_接点確保
4-4_自分の認識の整理		4 -4_情報収集とゴール設定の並行実施
5_留意・苦慮していること		
5-1_利用者への配慮	5-1_ニーズの把握	5-1_本人と家族・支援者の意見の違い
5-2_利用者との駆け引き	5-2_関係者間の調整	5-2_利用者との関係性の構築
5-3_利用者の意向や状況を掴む上での工夫	5-3_関係機関の連携	5 -3_失敗の振返り
5-4_目標の設定	5-4_計画作成	5-4_ニーズの把握
5-5_利用者と関係者との橋渡し	5-5_面談の進め方	5-5_支援の進め方
5-6_サービスの調整	5-6_相談の推進体制	5-6_本人が関心のもてる計画作成
5-7_接点頻度の検討	5-7_利用者や関係者の福祉サービスに対する理解	5-7_関係機関の強みをいかす調整
5-8_時間配分		
6_その他	6_その他	
6-1_先輩の凄いと思うところ	6-1_事業所での教育体制	6-1_関係機関との連携促進効果と悩み
6-2_このFGIに参加した感想	6-2_初回面談での同行の有無	6-2_「聞く」から状況に応じた提案への変化
	6-3_計画相談と委託相談の違い	6-3_使えそうなもの、つながりを生かす考え方
		6-4_足りない資源の法人へのはたらきかけ

表1-5. 2回目3年間の比較［熟達者］

R4.11.8	R5.11.27	2024.11.5
R4年度 熟達者 2回目	**R5年度 熟達者 2回目**	**R6年度 熟達者 2回目**
1_本人と家族の意見にズレがある場合	1_第1回FGI内容の振り返り（欠席者）	1.初回面談で最初に確認すること
1-1_ヒアリング	1-1_初回面談で最初に確認すること	1-1_利用者に関する情報収集
1-2_双方が納得するための働きかけ	1-2_次に確認すること	1-2_利用者との関係性の構築
1-3_相談員としての考え	1-3_判断の基になるもの	1-3_ニーズの把握
1-4_落としどころを決める	1-4_初回面談で設定しているゴール	1-4_面接の進め方
1-5_ヒアリング時の体制	1-5_留意・苦慮していること	1-5_面接場所
1-6_本音の聞き出し方		1-6_希望するサービスを踏まえた対応
1-7_判断に迷った場合の対応		
2_本人の意向がわからない場合	2_教える立場になってからの思考の変化	
2-1_本人の言動から判断	2-1_同行前の準備	
2-2_実践・体験の活用	2-2_面談に同席中の工夫	
2-3_本人の過去に関する情報収集	2-3_同行後の振り返り	
2-4_関係者の協力	2-4_同行が自分に与える影響	
2-5_本人の生活から判断	2-5_同行時の失敗	
2-6_タイミングを図る	2-6_自分がしたアドバイス	
2-7_本音を聞き出す上での注意点・苦慮している	2-7_人から学んだ方法	
2-8_意向が変化する・汲み取れない中でのプラン作成の工夫	2-8_経験の中で培ったもの	
3_その他	3_引継ぎケースでの留意点	
3-1_介入するタイミングの図り方	3-1_引き継ぐ情報	
3-2_地域の人との関係づくり	3-2_引継ぎの仕方・考え方	
3-3_利用者家族の変化への気付き	3-3_他領域との引継ぎ	
3-4_プラン作成における工夫・苦慮していること	3-4_障害児相談との引継ぎ	
	3-5_引継ぎ時の失敗	
	4_インフォーマルサポートの利用	4.初回面談で設定しているゴール
	4-1_活用するインフォーマルサポートの内容	4-1_緊急度や、対応のスピード感の判断
	4-2_インフォーマルサポートに関する情報収集	4-2_利用者に関する情報収集
	4-3_インフォーマルサポートに対する考え	4-3_ニーズの把握
		4-4_不可欠かつ最低限の事務手続き
		4-5_ゴール設定の判断
		4-6_利用者に見せる成果
		4-7_今後利用者と関係者がすべきことの整理
		4-8_今後のモニタリング実施方法
		5. 留意・ 苦慮していること
		5-1_利用者との関係性構築
		5-2_利用者の話を誤解したり、支援者側の価値観で捉えないこと
		5-3_情報共有
		5-4_他分野の価値観の違いを理解すること
		5-5_他機関とのかけひき
	5_その他	5_その他
	5-1_相談を始めた頃から一番変わったこと	

表1-6. 2回目3年間の比較［初任者］

R4.11.25	R5.11.2	R6.11.29
R4年度 初任者 2回目	**R5年度 初任者 2回目**	**R6年度 初任者 2回目**
1_本人と家族の意見にズレがある場合	1_トラブル対応・軌道修正	1.初回面談で最初に確認すること
1-1_ヒアリング	1-1_トラブルになった経緯	1-1_利用者に関する情報収集
1-2_双方が納得するための働きかけ	1-2_トラブル防止策・トラブルになった際の対応	1-2_利用者との関係性の構築
1-3_相談員としての考え	1-3_軌道修正時の対応	1-3_面接の進め方
1-4_本音の聞き出し方		1-4_引継ぎのケース
1-5_支援の方向性の確認		1-5_ニーズの把握
		1-6_利用者のニーズと相談員の見立てがズレた場合
2_本人の意向がわからない場合	2_各プロセスにおける工夫・配慮	
2-1_意向が変化する・汲み取れない中でのプラン作成における工夫・苦慮していること	2-1_アセスメントにおける工夫・配慮	
2-2_働きかけ		
2-3_本音の聞き出し方		
2-4_他者への相談		
3_その他	3_教える立場になってからの思考の変化	3.判断の基になるもの
3-1_本人・家族と支援者の意見のズレがある場合	3-1_相談支援全般に対する思考の変化	3-1_連携機関の判断の基
3-2_GSVについて	3-2_面談時の思考の変化	3-2_面談中の判断の基
3-3_今回のFGIの振り返り	3-3_関係者間の調整や関わりに対する思考の変化	3-3_計画作成の判断の基
	3-4_教えてもらう立場のときの状況	3-4_支援の方向性の判断の基
	4_引継ぎケースでの留意点	4.初回面談で設定しているゴール
	4-1_情報共有	4-1_ゴール設定方法
	4-2_方向性の共有	4-2_利用者のニーズに対応すること
	4-3_ケースによる対応の違い	4-3_ニーズ把握
	4-4_引継ぎ後の考え方	4-4_利用者への情報提供
		4-5_利用者に関する情報収集
		4-6_支援の方向性
	5_インフォーマルサポート の利用	5. 留意・ 苦慮し ていること
	5-1_活用しているインフォーマルサポートの内容	5-1_支援の方向性の見極め
	5-2_インフォーマルサポートに関する情報収集	5-2_意思や思いの板挟み
	5-3_インフォーマルサポートに対する考え	5-3_（ポジティブ・ネガティブかかわらず）脚色せず本人の言葉を落とし込む計画作成
		5-4_変化を本人と共有するモニタリング
		5-5_不足する社会資源の中での調整
		5-6_効率的に、しかし良好な関係をつくる関係機関調整
	6_その他	6_その他
	6-1_給付を受けるための計画作成と本人や家族の思いや将来を載せた計画作成に対する考え	6-1_ケースに関する他の相談員との意見交換
		6_2_他の相談員と計画を見せ合う機会
		6_3_他の事業との関り